

本書において、著者は、西方ラテン世界における「中世初期」の思想状況を、上述のように論理学と神学とのかかわりにおいて思考が展開された時代としてとらえ、傑出した思想家はわずかだとはいえ、看過してはならない時代とみなしている。とりわけ、前著に続き、glossaeに注目し「中世初期」の思想的空白を埋めようとする本書の試みは、他にあまり例がないだけに有意義なものといえよう。本書の末尾に付されている典拠資料の文献表は、(1) Firmly attributed works, (2) Anonymous works (i. Treatises with titles, ii. Untitled treatises, iii. Glosses and commentaries) に区分され、各著作について、英訳の有無、写本もしくは印刷刊本のどこを参照すればよいかが表示された便利なものであり、これがまた本書の特色ともなっているのである。

International Anselm Committee (ed.):

Anselm Studies, vol. 1

Kraus International Publications,

Millwood, New York 1983,

pp. viii+273.

山 崎 裕 子

アンセルムス研究誌として、*Analecta Anselmiana* が5巻まで刊行されていたが (Minerva GMBH, Frankfurt/Main 1969—76)、それを引き継ぐ形で *Anselm Studies* 第1巻が出版された。本書は、国際アンセルムス委員会の主催した第3回国際アンセルムス学会 (1979年7月2—5日、於カンタベリ) を契機として立案されたもので、同学会での M. Ramsey カンタベリ大司教の講演「ベック並びにカンタベリのアンセルムス」のほか7部に分かれ、英独仏伊語による18篇の論文とテキスト1篇が収められている。これは、同学会で発表されたものの3分の1強に当たるが、発表論文以外のものも含まれている。

構成は、次の通りである。

I 社会でのアンセルムス——R. W. Southern「カンタベリでのアンセルムス」, Marjorie Chibnall「ベックからカンタベリへ：アンセルムスと修道院の特権」, C. Holdsworth「死後のアンセルムス」。

II 『プロスロギオン』の論証—— Charles Hartshorne「アンセルムスとアリストテレスの様相の第一法則」, Michel Corbin「それよりも大きなものが考えられ得ないもの」, Joseph Moreau「理解され得ないことと考えられ得ないこと（アンセルムス, *Liber Apologeticus*, IV)」, Pietro Scapin「存在論的証明と意味論的無神論」, Desirée Park「パークリによるアンセルムスの論証の否認」。

III アンセルムスと言語—— Marcia L. Colish「聖アンセルムスの言語哲学再考」, W. Gombocz「アンセルムスの意味と意義について」, Eileen F. Serene「『ラムベス未完作品』におけるアンセルムスの作用論：行為論に関する中世の一見解」。

IV アンセルムスの後期著作—— Alasdair Heron「アンセルムスと Filioque 論：ギリシャ人たちに代わっての返答」, Paul A. Streveler「未来の出来事に関するアンセルムスの所説： *De concordia* の論証の批判的分析」。

V 祈禱書—— Benedicta Ward「『心情と熟考』：聖アンセルムスの祈禱と瞑想再論」, Thomas H. Bestul「聖アンセルムス, カンタベリの修道院共同体, 並びに後期アングロ・サクソンイングランドにおける祈禱書」。

VI アンセルムスの影響—— Helmut Kohlenberger「修道士ロドゥルフスにおけるラチオ：歴史的人間学の見解からの一試論」, D. E. Luscombe「聖アンセルムスとアベラルドゥス」, A. R. Lee「アンセルムスとバッキンガムのトマス： *Quaestiones super Sententias* に関する一考察」。

VII テクスト—— G. R. Evans「ヘレフォードの『プロスロギオン』」。

全篇に触れることは不可能なので、ここでは、歴史的視点からの論究、『プロスロギオン』の論証——特に、近・現代思想との比較——、同時代人の著作分析を通じてのアンセルムスの後代への影響、また、批判版刊行後も発見され続けている写本、という点に的を絞って、一部を紹介するにとどめたい。

R. W. サザン, “Anselm at Canterbury” は、アンセルムスがベックでの修道院長の身分すら好んでいなかったにもかかわらず何故カンタベリ大司教の職務を引き受けたのかという疑問を介して、大司教に就任した1093年から亡くなる1109年まで、アンセル

ムスがどのような原理のもとで行動していたのかを考察する。サザンによれば、アンセルムスは聖書におけるキリストの声に矛盾しない限りにおいて、修道院の慣習を受け入れたり大司教として活動した。その意味でアンセルムスは、神学と同様政治においても、妥協を許さない。1093年以降の書簡に教会法の引用が全くないことをサザンは指摘するが、それは、アンセルムスが社会の動きに振り回されなかったがためである、としている。アンセルムスにとって、究極の権威は聖書であった。周知の通り、彼は権威の引用を概して行わない。しかし、その著作には、聖書、Regula Sancti Benedicti、祈禱書、アウグスティヌス、ボエティウスの響^{ひびき}が非常に多く見受けられ、また、頻繁且つ明白に引用する唯一の書が聖書なのである。たとえば、『プロスロギオン』の論証にしても、その大部分が直接的には彼自身の瞑想に由来するとはいえ、聖書のテキストに関する瞑想である。アンセルムスが聖書を引用したのは、〈水路にある水よりも水源地にある水を好んだ⁽¹⁾〉ためであり、教皇、教父等による聖書解釈と異なる見解を有するためではなかった。すなわち、アンセルムスは、権威の依って来たるより高い源泉を求めて聖書を引用した、とサザンは解釈する。

ピエトロ・スカピン、「Argomento Ontologico e Ateismo Semantico」では、いわゆる「存在論的証明」と論理実証主義を、神の問題に関するより重要な返答と見做して、対比考察している。『プロスロギオン』第2章 (Ans. Op. Om., I, p. 101: 4—102: 3) と第3章前半 (*ibid.*, p. 102: 6—103: 3) を存在論的証明の第一構造・第二構造とし、また、意味論的無神論は或る意味では言語哲学の論理的帰結であるとの観点から、その一例として、A. J. Ayer の『言語・真理・論理』 (*Language, Truth and Logic*, 1936) の第6章「倫理学と神学との批判」からの数節を挙げる。アンセルムスもエイヤーも、存在的真理によって「唯一の根拠」l'unico fondamento が築かれると考えているが、前者の場合そのような根拠が置かれるのではなく前提となっており、後者の場合逆に、根拠が要請はされるが検証されていない。我々の認識を3段階に分けて、il livello ontico (存在的段階)・il livello onto-logico (存在一論的段階)・il livello logo-ontico (言語一存在的段階) と考えるならば、「唯一の根拠」は存在的段階のものである。しかし、存在論的証明も意味論的無神論も、存在的段階での人間の認識の地平を広げることができるような結論を呈示しておらず、前者は信仰を選択した帰結、後者は経験主義を選択した帰結である。この袋小路から脱け出すためには、存在的現実 (realtà ontica)

を問わねばならない。

デジレ・パーク, “Berkeley’s Rejection of Anselm’s Argument” は, ジョージ・パークリが潜在的にはあるが存在論的証明を否定していたことを述べ, 『人知原理論』・『アルシフロン』・『サイリス』等を引きながら, パークリの所説を解説し, 支持する立場を取る。著者によれば, 「それよりも大きなものが考えられ得ないもの」が必然的に存在することに対する論証は, この「大きなこと」が理解可能であることを仮定するのみならず, その人間の徳に対する優越性が, 無限者の有限者への優越性であることをも仮定している。他方, パークリは, 人間の心が有限な能力 (the powers) であるとまじめに考えており, 彼が無限な心 (an Infinite Mind) の存在を論じたのは, 感覚の観念を生み出す能力に既知の限界が全くないという理由によってである。

ヘルムート・コーレンベルガー, “Ratio bei Rodulfus Monachus: Ein Versuch aus der Sicht der historischen Anthropologie” は, 11世紀から12世紀へ移行行くにあたってのキーワードが ratio であるとの見地から, 修道士ロドゥルフス (別名 Ralph) が ratio をどのように用いたかを考察する。著者がロドゥルフスを一例として挙げた理由は, 1100年頃の知的環境を研究するために, 「平均的な著者たち」Durchschnittsautoren が ratio の概念をどのように用いたかを文脈研究することが好ましいと考え, 彼がその一人に該当すると見做したためである。従って, アンセルムスと同時代人であるロドゥルフス (1040—1124) は, 当時であっても余り知られていない人物である。オックスフォード大学ボドリ図書館 (Bodleian Library) の手稿本を用いての探究は, 次の二著作 *Libellus de peccatore qui desperat et de ratione quae peccatorem ne desperet confortat* 並びに *Meditatio cuiusdam christiani de fide et quia multa quae secundum fidem credimus etiam secundum rationem intelligimus* の範囲内でなされるが, 書名からして既に ratio の有り様を顯示している。ロドゥルフスにおいては, 「それよりも大きなものが考えられ得ないもの」 *id quo maius cogitari nequit* から「考えられ得るよりも大きなもの」 *das maius quam cogitari possit* を生ぜしめる思考構造が呈示されていることを, コーレンベルガーは示唆する。

G. R. エヴァンズ, “The Hereford *Prosligion*” では, シュミット版と異なる『プロスロギオン』のテキスト, *Anselmiana: De Rotolo*, 並びに付録として *De Humanis Moribus*, *Rursus de Propria Voluntate* から 38, 84, 90 及び *Miscellanea Ansel-*

miana (MS. Bodley 561) の 2 のテキストが紹介されている。これは、Hereford Cathedral Library, MS O.I. vi の f. 81^v—85^v に当たる部分で、そのうち『プロスロギオン』該当箇所は、f. 81^v—83^r である。エヴァンズによれば、アンセルムスは自らの原稿が正確に筆写されるよう注意を払っていたので、この写本が A. Wilmart や F. S. Schmitt のテキストと大幅に異なることはない。『プロスロギオン』について言えば、祈りの部分を取り去り多くを省略、言い換えや文章構成上の変化もあるので、「平易なテキスト」であるが、写本の製作者はアンセルムスの意向を無視して作品を凝縮している。収録されているのは、2, 4, 6—13, 15, 18—22の各章である。ヘレフォード写本の存在が以前から知られていたにもかかわらず、『プロスロギオン』の含まれていることが見過ごされてきた理由としてエヴァンズは、見出しが f. 81^r のまさしく終わりにのみ付されているために、一瞥しただけでは f. 81^v から新しい作品が始まることがわかりづらいこと、また、『プロスロギオン』第 2 章がシュミット版の真中 (I, p. 101, 9) から始まっていることの 2 点を挙げる。

以上、ごく一部を垣間見たにすぎないが、様々な視点から展開される論文により、アンセルムス研究の現状、動向の一端を窺い知ることができよう。言語哲学的側面からの研究が増えてきたことも、最近の傾向である。

Anselm Studies は、今後、国際アンセルムス学会開催と関連させつつ不定期刊行の予定で、第 2 巻は第 5 回大会 (1985 年 9 月 16—21 日、於 Villanova) の成果の一部を掲載して 1986 年度中に刊行されることになっている。なお、第 4 回大会 (1982 年 7 月 11—16 日、於 Le Bec-Hellouin) の成果は、*Spicilegium Beccense II* として、既に別途出版された (*Les mutations socio-culturelles au tournant des XI^e-XII^e siècles*, Édition du CNRS, Paris 1984)。今後のアンセルムス研究の一翼を担っていくであろう *Anselm Studies* の継続刊行を願ってやまない。

- (1) サザンのこの表現は、アンセルムスの次の表現を意識したものと思われる。cf. *Epistola de incarnatione verbi*, c. 13: *S. Anselmi Opera Omnia* II, p. 32, 12—15. Est hoc quoque hic considerandum quia fons non est de rivo nec de lacu, rivus vero de solo est fonte non de lacu, lacus autem de fonte et de rivo, et ita ut totus rivus de toto fonte et totus lacus de toto fonte et de toto rivo <sit>: